

第26回日本ペインリハビリテーション学会学術大会

運動機能領域 今井 亮太

2022年6月11日12日、第26回日本ペインリハビリテーション学会学術大会が開催されました。ペインリハビリテーション学会は、痛みのリハビリテーションや研究に携わる多領域の医療従事者および研究者が集まり、痛みとそのリハビリテーションを科学的な面から追求し、その活動を通じて国民にとって有益な医療の発展を図ることを目指しています。また、その成果を社会に広く啓発すると同時にそのリハビリテーションを担う人材を育成し、国内外の本分野の医療・研究の指導的な役割を果たすことを目指す学会です。

第26回日本ペインリハビリテーション学会学術大会は、コロナ禍後初の対面学会となりました。多くの学会が未だにオンラインで開催されている中の対面での学会開催であり、多くの人が参加されました。

私もこの学会に参加して演題を発表しました。演題名は、「人工膝関節全置換術後患者の階段昇降時の恐怖回避思考軽減を目的としたVirtual Reality (VR) アプローチ」であり、病院勤務の理学療法士とVRシステムの開発に携わっている広島大学工学部栗田教授との共同研究です。この研究のポイントは、人工膝関節全置換術後患者の運動障害として、

階段昇降が挙げられること、そしてその階段昇降時の運動障害に恐怖心が関与していることです。この恐怖心は、階段昇降時に痛みが生じるかもしれないとの恐怖から協調的なかつ適切な筋活動を得ることができないことが原因と言われています。つまり、恐怖を惹起しない状況下で階段練習を行うことができれば、実際の階段昇降練習で恐怖心を惹起せずに、運動障害が引き起こされないのではないかとこの仮説を検証しようとするものです。階段昇降を練習する前にVRを実施する群とVRを実施しないコントロール群に振り分けました。VRは、足踏みするだけであかかも階段昇降が行えているかのような経験ができるように作成されています。2群比較の評価項目として、階段昇降時の関節の安定性を評価しました。この関節の安定性は、階段昇降時にジャイロセンサー (myoMOTION) を装着し算出しました。その結果、コントロール群と比較してVR群の階段昇降時の関節が有意に安定していたことが示されました。つまり、階段昇降練習前に、VRを用いた仮想空間内での階段昇降練習は、運動学的データに影響を及ぼすことが示され、実際の階段練習に汎化できる可能性が示唆されました。